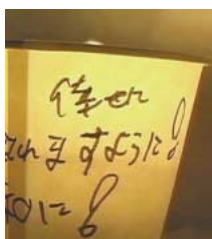




「小樽雪あかりの路」は、住んでる人、訪れる人が
うまく出会える場でありたい。

米花 正浩 (よねはな まさひろ)

「小樽雪あかりの路」事務局長



ろうそく1本1本に、あかりを灯してい
く…。この手作業から「小樽雪あかりの路」
は静かに始まります。1年で最も寒くなる2
月の10日間だけ、柔らかなろうそくのあ
かりに包まれる小樽の夜。歴史的建造物や運
河などの美しいまちなみ全体を会場に、住
んでる人、訪れる人たちがそれぞれの出会
いを楽しみます。平成11年の第1回目が約
18万人。前回、平成15年の5回目には、約50
万の人々が訪れました。このイベントに、多
くの人が惹きつけられる魅力とはいったい
何なのでしょう。

そこで今回は、「雪あかりの路」を「みち普請活動」にも通じる一つのまちづくりの事例としてとらえ、仕掛人の1人でもあり、事務局長を務める米花正浩さんにお話を伺いました。「雪あかりの路」の誕生から活動内容、今後のことなどを伺う中で、このイベントが大切に育んでいこうとするものが、あかりの先に見えてきました。



あえて冬と夜に挑戦 ※※※

「雪あかりの路」の始まりは、「小樽観光誘致促進協議会(略して以下、誘致協)」で平成10年に提出された報告書「小樽観光を考える」にさかのぼるそうです。これは、小樽観光の今後を考察し、どうしたら市民が誇りに思い、観光客から愛される場所になるのかが提示された実践的な報告書です。

「誘致協というのは、観光を切り口に市民と行政が同じテーブルで話し合う、小樽では初めての場所。その中の調査研究部会で小樽観光に関する調査研究を行い、平成10年に報告書をまとめました。その詳細は誘致協のホームページ『小樽マニア大集合』に載せてありますが、それを実際に行動に移していこうということで、小樽観光の弱点であった『冬』と『夜』をテーマにイベントをやらうと考えたんです。予算がないので、お金をかけずにね」と米花さん。ここから、市民と行政の協力によるまちづくりがスタートしました。

では実際には何をするのか。これはある大学生の一言がヒントになったそうです。「小樽運河にかまくらを作って、そこにあかりを灯したらきれいじゃないかな」。それが、雪にあかりを灯すという基本アイデアとなり、運河だけでなく、まちじゅうにあかりを灯したいという夢へと膨らんでいったそうです。イベントの名称は、小樽ゆかりの作家伊藤整の詩集『雪明かりの路』の情景と重なることから、「小樽雪あかりの路」と名付けられました。こうして、小樽の冬の夜の新しい物語が紡ぎだされていくことに…。

市民が主体のイベントに ※※※

このイベントは、あかり一つとっても、こだわりがあります。運河に浮かべる浮き玉キャンドルのあかりを電飾にするか、ろうそくの火にするかで意見が真っ二つに分かれたそうです。結果的には、何倍も手間のかかるろうそくの火が採用に。それは、「火」と「雪」のつくり出す世界が小樽のまちなみに一番似



合うとの判断からです。この決定が、効率とは違う別の価値観に魂を吹き込むことになりました。

「とにかく、市民が主体のイベントにしたかった。プロや観光業者にまかせっきりのイベントはダメだと。その方法論をとくとくとみんなに話しました。町内会に、今でも説明に行ってますよ。地元が苦労しながら、みんなでセンスよくしていく、そのプロセスが大事。人間関係が、そこにくっついてくるから面白いんであって、時にはけんかもしながらね(笑)」

市民と行政が一緒になって知恵を絞り、さまざまな試行錯誤の末、平成11年2月11日、第1回「小樽雪あかりの路」は誕生しました。

「雪あかりの灯す世界は、人工的な色であっては、絶対ダメ。あくまで自然の色を追求したい。雪の白さであったり、揺らめく炎の色であったり。もう自分でやっても、きれいだなあーって感激しますよ。ボランティアスタッフがろうそくに火を付けていると、『ご苦労様』『寒いのに大変だね』って、お客さんが声をかけてくれる。そういうイベントってあまりないんじゃないかな。火が消えてたらお客さんが付けてくれるしね。手がかかるからいい。『こんばんわ』『寒いね』『きれいだね』。多くは喋らないけど、こんな会話があちこちで聞かれるのもいい。『私たちなんか年とって合わないよね』と言ってる老夫婦の後姿を見て、いいよなあーって、側で1人で感動したりして…」

コミュニケーション観光を***

このイベントを通して、昔みたいに人と人のつながりを取り戻したいという米花さんは、こんなエピソードを紹介してくれました。

「ある町内会の子供さんが、昼間にスノーキャンドルを作って玄関の前に置いて、夜になって火を付けようと外に出たら、スノーキャンドルが壊されていた。うなだれる子供の姿を見た近所のお年寄りが、みんなで協力してキャンドルを作り、励ました。それがきっかけでキャンドル作りが広がって、その町内の路地が『雪あかりの路』になったんです。この気持ちが、雪あかりの路の原点じゃないかな。普段だったら、冬の夜のあの時間に、外へは出ないんですよ。町内のコミュニティーの復活という側面もあるんです。また、イベント期間中は多くのボランティアスタッフに支えられています。市民はもちろん、全国から、そして外国からもボランティアの応募があるんですが、小樽以外のスタッフは基本的に地元の一般家庭へのホームステイを考えています。実際に受け入れが始まると、より深い交流が広がっていくでしょうね。外の人と触れあうことで、小樽に住んでる人が地域の良さに気づく面もある。人を受け入れないと、まちはつまらなくなってしまうから。みなさん、観光そのものを勘違いしてるところがあって、観光は商売である前に、普通の暮らしのコミュニケーションが観光だよと。住んでる人と訪れる人がうまく出会える、コミュニケーション観光があったっていい」

夢の描ける場づくり***

「私たちの最終目標は、小樽市内の街灯が、全部消えること。街灯って保安のためですから、5分でも10分でも街灯が消えたら、世界一安全なまちということになる。ラジオから流れる『みなさんあかりを消しましょう』の合図で、一斉に消える……いいでしょう？ そんなケツの青いことを仲間と話してる。でも、それをちゃんとやろうよって。そんな世界一安全なまちで子供たちが成長していく。子供たちが自分のまちに誇りを持ち、夢を描けるような環境をつくっていくことは悪くない話。やはり、暮らしの環境全体を良くして行って、それではじめて観光でしょう」と、今後の夢を熱く語る米花さん。このイベントを通して、人やまちが随分と成長してきているといいます。「ろうそくのあかりが似合うまち」という新しい映像や、効率では計れない別の価値観を創り出したことは、住民意識の芽生えや、まちづくりへの自信につながったようです。

最後に、まちづくりのポイントを伺うと、「何より、自分たちが楽しんでやること。あんまり気張んなきゃいいんだよ。あとは、仲間。辛口のことも言い合えて、協力できる仲間や場所があるか、ないか」と、場づくりの重要性を挙げていました。

あかりの先に見えてくるもの……それは、住民の夢が描かれた未来の小樽の姿かもしれません。人々が、「いつか行ってみたい」「また行って過ごしたい」と、夢や愛着を持てる場所は、住んでる人が夢に向かって土地柄を育てている場所なのではないでしょうか。



第6回「小樽雪あかりの路」は平成16年2月6日(金)～15日(日)17:00～21:00開催
※詳細は小樽観光誘致促進協議会のホームページ「小樽マニア大集合!!」<http://www.otaru.gr.jp/>をご覧ください。

※写真提供/「小樽雪あかりの路」実行委員会